

「それにしても、いつの間に家なんて」

いつも利用しない駅で電車を降りて、エルヴィンに導かれるまま知らない道を歩く。何年も住み慣れた下町と違って、閑静な住宅街はなんだか少し落ち着かない。

「君に、あまりにも衝撃的な告白をされた次の日には建てようと決めてたよ」

「……あ？」

「恋人だと思つてたなかつて言つただらう？」

いまだに根に持っているのか、恨めしそうな視線を向けられた。最近になつてわかつたことだが、どうもエルヴィンは案外と子どもっぽい一面があるようあつた。特に、リヴァイに対しては。

「俺は、いつプロポーズしようかと真剣に考えていたの……君にまったく伝わっていなくて絶望したよ」

「……そりゃ、悪かつたよ。鈍感で悪かつたな」

「いや、きちんと言葉にしなかつた俺が一番悪い。何故かな、君には言わなくても気持ちに通じ合っているような気がして……」

手袋越しに、ぎゅっと手を握られた。お互いの大きさが全然違うから、手を繋ぐとエルヴィンの手に包み込まれているような感じになる。それが不思議と落ち着く。

「だからこれからは、毎日ちゃんと朝と晩に『愛している』と口にする」

「……勘弁してくれ」

そんなむず痒い扱いをされるのは、慣れていない。顔が熱く感じるのは、きっと冷たい風のせいだけではないだろう。

駅から十五分ほど歩いたところで、エルヴィンが足を止めた。目の間に真新しい家が建っている。リヴァイが好きだと答えたグレーの外壁で飾られ、門灯はランタン風の形をしている。

「君の通勤時間が、今とあまり変わらないで済む場所を探すのが一番大変だった」

門を開け、玄関の扉に鍵を差し込みながらエルヴィンが言う。たまたま条件に合う土地が売りに出されている確率を思うと、エルヴィンがこの家を建てるのに並々ならぬ労力を払っただろうということは予想がついた。

「入つて。今日から君の家だ」

扉を開けたエルヴィンに笑顔で促され、新居に足を踏み入れた。まだ何も荷物の置かれていない、広々とした玄関を抜けると大きな窓のあるリビングが続いている。昼間はきつと、太陽の光がよく差し込むことだろう。

天井は二階まで吹き抜けになっていて、開放感がある。リビングとひと続きになったキッチン是对面型のオープンキッチンで、作業スペースが十分に確保されていてふたり並んで立つても狭く感じないように作られていた。

広くて深めのシンクの反対側には作り付けの収納があり、上部はいつか展示場で見たとように、下にスライドして出し入れができるようになっていた。

『君の好みは全部取り入れてある』というエルヴィンの言葉は、嘘ではないようだ。

「オープンなんかは明日にでも見に行こう。足りない家具も揃えないといけないし」

「ああ……」

まだ、これから自分がここに住むのだという実感が持たずに生返事になってしまった。真新しい匂いと、荷物が何も無いせいでそれこそどこかのモデルハウスのように感じてしまう。

キッチンに続いた一角は、リビングからは見えないう食料庫になっている。棚の他に床下にも収納があり、買い置きのお食料品を保管しておくのに置き場所に困ることはなさそうだ。

他の部屋を見に行こう、と促されてリビングを出る。向かいには脱衣室を兼ねた洗面所。洗面台は汚れが付きにくいという素材でできているらしく、手入れのしやすさが売りなのだという。ここにも収納スペースがたっぷり取られていて、洗濯したリネン類や着替えを置けるようになっていた。

浴室は広々としていて、床は冬でも冷たくならず、水が乾きやすい素材でできているらしい。

「カビが生えにくいそうだよ」

と言われて目を輝かせた。

「浴槽はふたりで入っても窮屈でないのにした」

「え」

「当然だろう？」

にこやかにエルヴィンが笑う。きつと、素直に温まるだけでは済まないのだろうなと容易に想像がついた。

「耳が赤くなってる。何を考えた？」

「……うるせえ、変態」

にやにやと笑うエルヴィンを置いて、浴室を出た。階段の電気を付けて上の階に上る。南側に大きな窓があつて、バルコニーに繋がっている。

「ここにソファでも置いたらいいかと思つて」遅れて二階に上がつてきたエルヴィンにさりげなく肩を抱かれる。確かに、休日のにんびりと日光浴を楽しむにはよさそうだ。

二階には、主寝室の他にふたつの部屋がある。「お互いのプライベートな空間も大事だからね」

リヴァイに割り当てられた部屋は、今住んでいるアパートの部屋よりもずっと広い。ここも、やはり壁の一面が収納になつている。

「こんなに広くても持て余しちまいそうだし……」
「君の部屋は殺風景だからな。もつと物を置けばいいのに」

「……はあ？ お前の部屋が物を置きすぎなんだよ」
広い部屋に住んでいるというのに、リビングや寝室の床にまで積み上がっているエルヴィンの蔵書を思い出す。なんでもそつなくこなすこの男も、片付けだけは苦手なのだ。リヴァイはよく知つている。

自分の部屋が広いなら、喧嘩した時に寝るのにも困らないと気付いたが口には出さないのでおく。

隣のエルヴィンの部屋は、スライド式の書架が壁の二面を占めている。きつと、これだけスペースがあつてもすぐにいっぱいになってしまうのだろうが。

この家のすべての部屋がそうであるように、主寝室もやはり広い。ウォークインクローゼットと、小さな洗面化粧台が備えられている。

「ああ、せっかくだしベッドも新調しよう。天蓋付きのなんて、どうかかな」

「馬鹿を言え」

クローゼットの隅から、ごそごそとエルヴィンが真新しい毛布を何枚か持ち出してきた。

「なありヴァイ、今夜はもう遅いし、泊まっていかないか。明日の朝は食料を買い出すところから始めないといけないが……」

「最初から言ってくれば着替えを用意するのに」
「ごめん」

「まあいい。たまにはこういうのも悪くない」
厚手の毛布を重ねて床に敷き、下着姿になつてその上に寝転ぶ。ぴったりと寄り添つて毛布を被れば、

暖房が入っていないともそれほど寒くはない。

カーテンの掛かっている窓から、仄かな月の光が差し込んで間近にある顔ぐらひは確認することが

できた。

「子どもの頃」

「……あ？」

「嵐が来ると、わざと電気をつけない薄暗い寝室でこうやって毛布を被って、ランプの灯りを頼りに本を読むのが好きだったんだ。なんだか無性にワクワクして」

「変わった趣味だな」

自分でもそう思う、とエルヴィンが照れたように笑う。きつとエルヴィン少年はさぞかしませて、利発な子どもだったことだろう。

「そんな時に古い神話や歴史の本を読むと、まるで彼らの息づかいが感じられるような気がして……」

昔を懐かしむエルヴィンの横顔に、なぜか既視感を覚えた。遠い昔、どこかでこの男の、こんな表情を見たことがあるような気がする。

そんなはずはないのに。

「一番お気に入りだったのは、『リヴァイ兵士長』の英雄譚だった。大人になってから、ずいぶんと脚色されて子ども向けにアレンジされていたのだからわかったけどね」

「ふうん……」

「ずっと、憧れていたんだ。だから、彼とまったく同じ名前の君と偶然知り合えた時、これは運命なんじゃないかと思った」

「……初耳だ」

「初めて言うからね」

しれつと言いつつ切られた。なんてことはない、あの恋愛ドラマと同じだ。お互いに運命めいたものを感じて、一目惚れ。ひねりがなさすぎて、そのままでは一話で終わってしまうハッピーエンド。

リヴァイが鈍感すぎたせいでエルヴィンの気持ちに気付かず、ちよつと回り道をしただけ。少女漫画ならともかく、いい年したおっさん同士でやっていたなんて、恥ずかしくて憤死してしまいそうだ。

頭まで毛布に隠れたら、「こら」と捲られた。

「おやすみのキスがまだだ」

「……はあ？」

「ああ、明日は起きたらおはようのキスも」

柔らかな感触が唇に触れて、すぐに離れる。

「おやすみ」

「……おやすみ」

悪くないなんて思ってしまう自分も、たいがいどうかしている。